

令和 4 年 6 月 26 日現在

機関番号：28003

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K12072

研究課題名(和文) 乳がん患者の生命予後に影響するオーダーメイドのウォーキングプログラムの開発と普及

研究課題名(英文) Development and dissemination of tailor-made walking programs that affect the prognosis of breast cancer patients

研究代表者

玉井 なおみ (Tamai, Naomi)

名桜大学・健康科学部・教授

研究者番号：80326511

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、乳がん患者が日常生活に簡便かつ持続的に活用可能なオーダーメイドのウォーキングプログラムの開発と普及である。調査の結果、乳がん患者の4割が診断後に活動的ではなくなり、その後も6割が活動的ではない生活であること、医療者による運動支援のニーズが高いことが明らかとなった。また看護師で運動支援を実施している者は41.7%であり、がんと運動の効果に関する知識不足や時間の不足が障壁となっていた。調査結果をもとに教育媒体としてがんと運動に関するエビデンスと感染対策の情報を取り入れかつ日々の活動を記載できる運動ノートを作成したが、COVID-19の流行により介入研究に至らなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、乳がん患者は診断後に4割が活動的ではなくなり、その後も6割が活動的な生活ではないこと、医療者による運動支援のニーズが高いことが明らかとなった。一方で医療者による運動支援には差があり、看護師の運動支援は41.7%、がんと運動の効果に関する知識不足や時間の不足が障壁であった。今回、乳がん患者の運動の状況や求めている支援内容、医療者による運動支援の実態と課題が明らかとなった。COVID-19の流行により介入研究には至らなかったが、本研究で明らかになった事項を踏まえて乳がん患者の運動支援プログラムを構築することは、乳がん患者の生活に根差した継続できる運動支援の一助になるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop and disseminate a tailor-made walking program that breast cancer patients can use comfortably and sustainably in their daily life. As a result of the survey, it became clear that 40% of breast cancer patients became inactive after diagnosis, and 60% of them lead inactive lives afterward, and that they had a high need for exercise support by health care providers. In addition, 41.7% of nurses provided exercise support, and lack of knowledge about the effects of cancer and exercise and lack of time were barriers. Based on the survey results, we created an exercise note that incorporates evidence on cancer and exercise and information on infection control as an educational medium and describes daily activities, but was not used in the intervention study due to the spread of COVID-19 infection.

研究分野：がん看護

キーワード：乳がん 運動 生命予後 オーダーメイド

1. 研究開始当初の背景

運動はがん罹患の予防のみならず、乳がん患者の再発リスク軽減や予後の改善、治療中と治療後の倦怠感や疼痛などの症状緩和、自尊感情の改善なども報告されており、米国スポーツ医学会(2010)や米国癌学会(2012)は、がん患者の運動のガイドラインを公表している。さらに、日本乳癌学会においても運動は乳がん患者の死亡リスクを減少させるとし、運動を推奨している。しかし、看護師の「がんと運動」に関する知識不足、時間の不足によりがん患者へ運動支援ができていない現状や、未だ古典的な「休息」のみが推奨され、本邦においては運動の効果に関する研究も限られているのが現状である。島嶼県である沖縄においても国内外の状況と同様に、乳がん患者への運動支援は十分になされていない現状にある。

がん患者の運動支援で最も用いられている運動としてウォーキングが挙げられる(玉井、MASCC/ISOO 2015、日本がん看護学会 2015)。ウォーキングが好まれる理由はいつでも手軽に一人でも行えるからであり(外崎、2009)、運動施設の少ない離島・へき地の多い沖縄においても最も適した運動であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、乳がん患者の生命予後に影響する運動に焦点をあて、乳がん患者が日常生活に簡便かつ持続的に活用可能なオーダーメイドのウォーキングプログラムの開発と普及を目的とする。

オーダーメイドとは、個々の生活に合わせたスタイルのことであり、乳がん患者が「がんと運動」のエビデンスを知ったうえでオーダーメイドの運動方法を見出せるように医療チームで支援を行うものである。患者への情報提供のために、最新のエビデンスから教育媒体と成功事例集を作成し、乳がん患者が自らの生活に応じた方法を見出し継続できる運動支援を医療従事者と共に検討する。さらに、外来で活用可能なオーダーメイドのウォーキングプログラムを開発し、その普及を目指す。

3. 研究の方法

(1) 国内外で実施されているがん患者の運動に関する情報収集

「がんと運動」に関する国内外の論文をCINAHL、Medline、Cochrane Library、医学中央雑誌web版などで最新の情報を得るとともに、がん患者への運動の介入研究に特化した文献を検討し、論文としてまとめた。

米国がん看護学会(ONS)企画「がん患者の運動」をテーマとしたWeb研修を受講し最新の知見を得ると共に、がん患者の運動支援に活用するための参考資料とした。

(2) 「がんと運動」に関する質問紙調査の実施

がん患者の運動支援に関わる医療従事者(看護師、リハビリセラピスト、医師)を対象に、がんと運動の予防効果の知識の有無、運動支援実施の有無、運動支援の阻害要因などについて質問紙調査を実施した。

乳がん患者を対象に、がんと運動の予防効果の知識の有無、希望する運動支援の方法(個別・集団・電話など)、運動支援のニーズ等について質問紙調査を実施した。

欧州日本人会のセミナー(開催地;ドイツ、スイス)の参加者を対象に、がんと運動の予防効果の知識の有無、希望する運動支援の方法(個別・集団・電話など)、運動支援のニーズ等について質問紙調査を実施した。

(3) 「がんと運動」に関する啓発活動

がん診療連携拠点病院の看護管理者等を対象に「がんと運動」に関する講演を行った。

乳がんの患者会で「がんと運動」に関する講演を行った。

欧州日本人会のセミナー(開催地;ドイツ)及び医療セミナー(開催地;スイス)において、講師としてがんと運動に関する啓発活動を行った。

国内外の関連分野の学会で論文発表ならびに学会発表を行った。

(4) 乳がん患者のオーダーメイドのウォーキングプログラムとしての教育媒体の開発

先行研究ならびに著者の研究成果をもとに教育媒体をとして運動ノートを作成した。教育媒体を用いて乳がん患者を対象とした運動支援の介入研究を計画していたが、COVID-19の流行による医療施設への入館制限等により実施には至らなかった。

4. 研究成果

(1) 国内外で実施されているがん体験者の運動に関する情報収集と啓発活動

医学中央雑誌とPubMedなどを活用して、国内外の乳がん患者に対して実施されている運動プログラムに関する文献を検討した。うち25件(2,737例)を分析対象の文献として選定し、研究目的、研究デザイン、運動プログラム、アウトカムについて分析した。結果、「運動プログラムの評価」や「副作用の緩和」を目的として実態調査(4件)、介入研究(21件)がなされていた。運動プログラムは有酸素運動とレジスタンス運動などを組み合わせた運動が52.4%、支

援期間は4ヶ月以上の長期支援が61.9%と多く、支援方法はグループ支援が57.1%と多かった。乳がん患者は運動支援に関心があり、化学療法などの治療やがん関連の症状が運動の障壁になっていた。乳がん患者は運動プログラムに参加することで「副作用の緩和」や「QOL向上」などの効果を得ていた。文献検討した成果は学術誌に発表した(玉井, 2016)。

米国がん看護学会(ONS)のWeb研修を受講し最新の知見を得た。その内容は教育媒体の基礎資料や市民公開講座および乳がん患者会の参考資料として活用した。

(2) 「がんと運動」に関するリテラシー調査の実施

がん患者の運動支援に関わる医療従事者および乳がん患者を対象に「がんと運動」に関するリテラシー調査を実施した。

がん患者の運動支援に関わる医療従事者(看護師、リハビリセラピスト、医師)を対象に、がんと運動の予防効果の知識の有無、運動支援実施の有無などについて質問紙調査を実施した。結果、看護師、リハビリセラピスト(理学療法士、作業療法士)、医師から計702件の回答を得た。がん患者への運動支援はリハビリセラピストが70.8%と最も多く、次いで医師55.2%、看護師41.7%であった。運動支援の関連要因では特にがんと運動の教育経験や患者の知識不足が関連していた。がんと運動の予防効果の知識、求めている支援方法において職種間で差が認められた。共通していた事項としては、医療者へのがん患者に対する運動の予防効果の啓発や多職種連携の必要性などであった。看護師を対象とした調査(有効回答463名)において(玉井, 2019)、がん患者へ運動支援を実施している理由で最も多い回答はQOL向上69.9%であり、再発リスク軽減は9.8%であった。がん患者への運動効果に関する知識で高い項目は、QOL向上71.1%、睡眠改善66.9%であり、倦怠感緩和(27.0%)や再発リスク軽減(27.8%)といったがん特有の症状や再発予防に関する知識は低かった。運動支援の関連要因は、看護師の特性である「性別」「がん患者のケアの割合」「運動習慣」、看護師の知識項目である「倦怠感緩和」「不安の軽減」、運動支援の阻害要因である「適応患者が分からない」「安全性が分からない」「継続期間が分からない」「患者の知識不足」「家族のニーズ」の10要因が抽出された。以上の結果より、看護師によるがん患者への運動支援は低く、運動支援には看護師の知識不足だけでなく、患者の知識不足や家族のニーズも関連していた。がん患者への運動支援を促進するためには、看護師と患者・家族への運動の予防効果の啓発が重要であった。

乳がん患者を対象に、がんと運動の予防効果の知識の有無、希望する運動支援の方法(個別・集団・電話など)、運動支援ニーズ等について質問紙調査を実施した(有効回答293名、有効回答率84.2%)(玉井, 2019)。運動している者は58.4%、乳がん診断後の活動低下は41.3%であり、その後も活動的ではないまたは座りがちの生活を送っている者は62.2%であった(図1)。運動支援を91.9%が希望しており、医療者による支援を望んでいた。運動効果の知識は、睡眠の改善など一般的な効果は約70%知られているが、乳がんに関連した効果は50%以下であった。運動実施の関連要因として「年齢」「仕事」「化学療法」などの7要因が抽出された。年齢が若く有職者で化学療法中の者は運動実施が低かった。乳がん患者に対し運動の効果に関する啓発と治療や体調の影響を考慮した継続できる医療者による運動支援が必要であった。

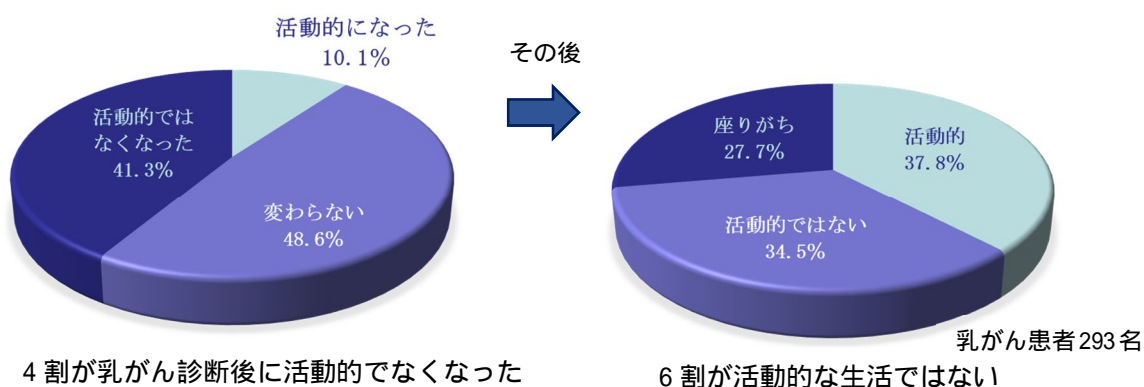


図1. 乳がん患者の身体活動

「がんと運動」のシンポジウムを企画し参加した医療従事者および一般市民を対象にがん患者の運動支援に関する調査を実施、論文としてまとめ学術誌で発表した(玉井, 2017)。結果として、がんの再発や治療の副作用に対する運動の予防効果の認識で高いものは倦怠感緩和42.0%、睡眠の改善40.6%、再発予防39.1%であった。全員が運動支援を希望した。希望する支援方法は複数支援であり、在宅や施設で実施できるものであった。がん体験の有無別では希望する支援内容に有意な差はなかった。今後、運動のがん予防効果の啓発活動を行うとともに、がん患者が治療や体調に合わせながら実施できるオーダーメイドの運動支援プログラムの開発が重要であった。

国外における「がんと運動」に関する認識調査

「欧州日本ネットワーク ENJA 第9回大会」において欧州 11 カ国に在住の日本人を対象にがんと運動の予防効果の知識の有無、運動支援実施の有無等について質問紙調査を実施した（開催地；ドイツ ハイデルブルグ）。さらにスイス在住の日本人を対象とした「ベルン医療セミナー」の参加者ががんと運動の予防効果の知識の有無、運動支援実施の有無等について質問紙調査を実施した（開催地；スイス ベルン）。調査の結果、国内と同様にがんに対する運動の予防効果の認識は高いとはいえず、さらに運動支援がなされていない現状が明らかとなった。また、「がんと運動」に関する啓発活動や運動支援のニーズが高いことが明らかとなった。

(3) 「がんと運動」に関する啓発活動

がん患者の運動支援に関わる医療従事者および乳がん患者を対象に「がんと運動」に関するリテラシー調査の分析結果を論文としてまとめ、学術誌および学術学会で発表した。

がんと運動に関する文献を検討し、日本リハビリテーション看護学会誌で発表した（玉井，2016）。

看護師を対象としたとした研究成果を論文としてまとめ、日本がん看護学会誌で発表した（玉井なおみ，2019，2020 年度 学術奨励賞受賞）。

乳がん患者を対象とした研究成果を論文としてまとめ、日本緩和医療学会誌で発表した（玉井なおみ，2019）。

がん患者の運動支援に関わる医療従事者の調査結果を国内外の学術学会で発表した。

日本リハビリテーション看護学会より執筆依頼を受け「がんと運動」についてまとめ寄稿した（玉井なおみ，2019）。

乳がん患者会および患者サロンで「がんと運動」について講演を行った。COVID-19 流行により患者サロンが休会する 2020 年度以前まで毎年講師として担当した（現在も休会中）。

「欧州日本ネットワーク ENJA 第9回大会」において欧州 11 カ国に在住の日本人に対して「日本の終末期ケアの現状と倫理的問題」について講演し、その中で「がんと運動」について紹介した（開催地；ドイツ ハイデルブルグ）。

スイス「ベルン医療セミナー」において「がんと運動」をテーマに講演を行った（開催地；スイス ベルン）。

がん診療連携拠点病院の看護管理者およびがん看護専門看護師、認定看護師を対象に「がんと運動」について講演を行った。

看護学部教育ならびに博士前期課程の教育の中に研究成果を組み入れ、「がんと運動」に関する教育を行った。

(4) 乳がん患者のオーダーメイドのウォーキングプログラムとしての教育媒体の開発

がん患者の運動に関する国内外の先行研究および著者の研究成果をもとに教育媒体「運動ノート」を作成した。

運動支援プログラムの構築に向けて、国内外の関連する分野の先行研究の分析および学術学会や研修会に参加して最新の知見を得た。

乳がん患者の診療を行なっている施設に研究の概要を説明し、研究協力を依頼し内諾を得た。しかし、2019 年度末より流行した COVID-19 の感染拡大により医療施設における入館制限等により乳がん患者を対象とした介入研究には至らなかった。

先行研究ならびに著者の研究成果を踏まえ運動ノートを作成した（図 2）。また、COVID-19 の感染拡大により感染対策の情報を盛り込んだ。



図 2. 運動ノートの例

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 親富祖結子, 玉井なおみ | 4. 巻 10巻1号 |
| 2. 論文標題 触れるケアが終末期がん患者とその家族にもたらす影響：文献レビュー | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 日本リハビリテーション看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 79-87 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 木村安貴, 中村聡美, 玉井なおみ, 照屋典子, 砂川洋子, 本村真 | 4. 巻 26 |
| 2. 論文標題 大学生の進行がん告知に対する認識と終末期ケアに関する教育の受講経験との関連 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 名桜大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 in press |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 玉井なおみ, 木村安貴, 神里みどり, 西田涼子 | 4. 巻 14(2) |
| 2. 論文標題 乳がんサバイバーの運動実施の状況と関連要因 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 日本緩和医療学会誌 | 6. 最初と最後の頁 97-105 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2512/jspm.14.97 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 玉井なおみ, 木村安貴, 神里みどり | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 看護師によるがんサバイバーの運動支援の現状と関連要因 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 日本がん看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 65-76 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18906/jjscn.33_tamai_20191115 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 玉井なおみ | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 がんと運動 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 日本リハビリテーション看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 33-36 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 玉井なおみ、神里みどり | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 看護師が捉える終末期がん患者の「その人らしさ」の概念分析 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 名桜大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 69-78 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 玉井なおみ、神里みどり、西田涼子、野崎希元 | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 がん再発や治療の副作用に対する運動の予防効果に関する医療者と市民の認識 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 日本リハビリテーション看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 59-67 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 神里みどり、大城真理子、山口賢一、玉井なおみ、謝花小百合 | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 がん患者の倦怠感を軽減するための運動療法のエビデンス：文献レビュー | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 日本リハビリテーション看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 25-33 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 玉井なおみ、木村安貴、大城綾子 | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 終末期看護教育がもたらす看護学生の終末期ケアに対する意識の変化 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 名桜大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 1-13 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 玉井なおみ、神里みどり | 4. 巻 6 |
| 2. 論文標題 乳がんサバイバーの運動プログラムに関する文献検討 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 日本リハビリテーション看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 27-33 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 木村安貴、玉井なおみ、照屋典子 |
| 2. 発表標題 がん患者における就労関連スティグマの様相に関する文献検討 |
| 3. 学会等名 第35回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 玉井なおみ、木村安貴、神里みどり、西田涼子 |
| 2. 発表標題 医療者によるがんサバイバーへの運動支援の実施状況と関連要因 |
| 3. 学会等名 第24回日本緩和医療学会学術大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 玉井なおみ, 木村安貴, 西田涼子, 大城凌子 |
| 2. 発表標題 Change in Nursing student's attitude of terminal care through end-of-life nursing education: Evaluation using the Frommelt Attitude Toward Care of Dying Scale, Form B and the qualitative analysis |
| 3. 学会等名 2019 AAPINA & TWNA Joint International Conference Notification, Taiwan. (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 木村安貴, 玉井なおみ, 照屋典子 |
| 2. 発表標題 意思決定支援に関わる看護師が進行がん患者・家族に「体験」を語る経験 |
| 3. 学会等名 第24回日本緩和医療学会学術大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 神里みどり, 大城真理子, 玉井なおみ, 源河朝治, 宇地原広海 |
| 2. 発表標題 Massage therapy for symptom relief in patient with advanced cancer: A systematic review, |
| 3. 学会等名 2019 AAPINA & TWNA Joint International Conference Notification, Taiwan (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 神里みどり, 大城真理子, 源河朝治, 玉井なおみ, 宇地原広海, 謝花小百合 |
| 2. 発表標題 Educational intervention for symptom relief in patients with advanced cancer: A systematic review |
| 3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Naomi Tamai, Midori Kamizato, Yasutaka Kimura, Ryoko Nisida |
| 2. 発表標題 Research of Recognition of the Exercise Effect and Exercise Support Needs of Breast Cancer Survivors |
| 3. 学会等名 2018MASCC/ISOO Annual Meeting (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 木村安貴, 玉井なおみ, 西田涼子, 神里みどり |
| 2. 発表標題 がん療養における運動支援の認識と実施に関する実態調査 リハビリ専門の医療従事者を対象として - |
| 3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 玉井なおみ, 木村安貴, 神里みどり, 西田涼子 |
| 2. 発表標題 がんサバイバーの運動支援に関する看護師の認識と実施に関する実態調査 |
| 3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 長瀬由美, 玉井なおみ |
| 2. 発表標題 緩和ケア病棟における終末期がん患者の「その人らしさ」を支える看護の探求 |
| 3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 木村安貴, 仲村聡美, 玉井なおみ |
| 2. 発表標題 進行がんに関連する告知についての大学生の認識とその関連要因 |
| 3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 玉井なおみ, 木村安貴, 大城綾子 |
| 2. 発表標題 終末期看護教育がもたらす看護学生の終末期ケアに対する意識の変化 |
| 3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 島袋美希, 玉井なおみ |
| 2. 発表標題 外来看護師によるがん患者への意思決定支援の現状と課題 |
| 3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 川越大成, 玉井なおみ |
| 2. 発表標題 緩和ケア病棟で看取り経験のある看護師の「死」の捉え方 |
| 3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 上地理子、玉井なおみ |
| 2. 発表標題 終末期がん患者の家族が受容に至るまでの対処過程と看護支援の現状：文献レビュー |
| 3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 神里みどり，大城真理子，謝花小百合，玉井なおみ，吉澤龍太，源河朝治，濱田香純 |
| 2. 発表標題 がん患者の苦痛症状緩和のための補完代替療法のエビデンスカードの開発と有用性 |
| 3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 玉井なおみ，神里みどり，西田涼子，野崎希元 |
| 2. 発表標題 がん予防としての運動に関する医療職および市民の意識調査 |
| 3. 学会等名 第31回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 中村愛華，玉井なおみ |
| 2. 発表標題 がん及びオピオイド鎮痛薬に対する看護大学生の認識 |
| 3. 学会等名 第31回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 米田祐梨, 玉井なおみ |
| 2. 発表標題 自分や家族が末期がんになったとき - 看護学生が考える告知の在り方と終末期の生き方 - |
| 3. 学会等名 第31回日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大峰光博, 奥本正, 玉井なおみ, 東恩納玲代 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 ふくろう出版 | 5. 総ページ数 113 |
| 3. 書名 大学1年生のためのレポート・論文作成法 | |

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大峰光博, 奥本正, 玉井なおみ, 東恩納玲代 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 ふくろう出版 | 5. 総ページ数 119 |
| 3. 書名 大学1年生のためのレポート・論文作成法 第2版 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 神里 みどり (Kamizato Midori) (80345909) | 沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・教授 (28002) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-------------------------------------|----------------|
| 研究分担者 | 木村 安貴 (Kimura Yasutaka) (90812917) | 名城大学・健康科学部・上級准教授 (28003) | 追加：2017年10月19日 |
| 研究分担者 | 西田 涼子 (Nishida Ryoko) (40557295) | 名城大学・健康科学部・助教 (28003) | |
| 研究分担者 | 野崎 希元 (Nozaki Marechika) (60733441) | 名城大学・健康科学部・助教 (28003) | 削除：2018年3月12日 |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |